

東京大学名誉教授の小宮隆太郎氏が逝去された。文化勲章の受章者であり日本を代表する経済学者であるので名前を聞いたことのある方も多いと思う。私にとっては、恩師であるだけでなく、私が小宮先生の東大での担当のポストを後継したという関係だ。

論壇のような場で個人的な話を書くのが適切かと言われるかもしれないが、小宮先生のもっと学んだことは、大学や社会での学び方を考える上で重要な材料を提供してくれる。小宮先生の少人数の授業の特徴は、「議論」の一言に尽きる。ある問題について学生と小宮先生の間で論争が続けられる。議論を活性化させるため、小宮先生はあえて学生と異なった論点を出してくる。それでも、日本を代表する先生を学生が論破することは難しい。当時は、小宮先生の授業に出るのにびびり緊張していた

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

### 論壇

とを記憶している。

この議論から私たち学生は多くのことを学んだ。以前にこの論壇でも書いたことがあるが、学ぶスタイルには三つある。一つは本を読んだり講義や講演を聞いたりして学ぶことである。ほとんどの学校ではこれが中心だが、受け身の学びでしかない。

二つ目のスタイルは、資料を作っ

### 小宮隆太郎先生との議論

たりプレゼンテーションをしたりすることだ。人の前で話をしたり、文章にまとめたりすることで、より主体的に多くのことを学ぶことができる。しかし、この学び方も一方通行の情報ではない。

そこで重要となるのは、三つ目の学び方である。それが討論などを通じて、相互作用の中で学ぶことであ

る。自分の意見を相手にぶつけて反応をみる。相手から投げかけられた質問や批判に応えようとして自分なりに考える。さらには、他の人と一緒に考えて共通の問題への答えを見つけてよとする。こうした他人とのやりとりを通じて、私たちは多くのことを学ぶことができる。

もちろん、こうした議論の中から学びは、大学レベルでの専門分野

に書かれたことでは学ぶことができない多くの発見がある。

残念ながら、日本の教育ではこうした議論の中から学ぶという機会があまりにも少なかった。私の学びを振り返っても、高校までの学びは授業や教材を通じての一方向の学びが中心であった。その意味でも、大学に入って小宮隆太郎先生という偉大な議論の相手に恵まれたことは私にとって幸いであった。

だけに限られるものではない。職場での同僚や先輩との議論、中学や高校でのディベートの授業など、さまざまなレベルで実行可能なはずである。ハーバード大学のビジネススクールの中心であるケーススタディーでは、特定の企業の事例(ケース)について学生が教師と議論することで多くのことを学んでいく。教科書

私自身、大学生を教えるようになってからは、小宮先生のやり方をまねいた面が多かった。学生もそれぞれいろいろ学んでくれたと考えたいが、驚くべきことに、私自身も学生との議論から多くのことを学んできたということだ。人間の頭脳は、他人との議論のやりとりによって大いに刺激されるものであるようだ。小宮隆太郎先生のご冥福をお祈りしたい。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。